



19  
2014  
6

高、舟、内、田、中

異國 和莊 後編 卷二

長足國

叔美より 舟が 飛トも 蒲萄酒 此れ 舟より 舟より 舟より

此れ 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より

やど 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より

此れ 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より

小舟 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より

まに 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より

倍 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より 舟より





つらも長崎のくひまて東に居る一國ありあま  
 ま方まらあてらまて一にあてこれ自由自を必に  
 く我摺れ霧之わぐ古つてごらるとらばそまいあり  
 うい養て此府りまらう先向ふ此勢も海にほあえ  
 下といづこまていうやうとあまてもけふよめ外  
 余必にまらまてつて密國ふといまあうう是ら  
 二十百里が海に波濤たふして渡海止るの  
 ねにくが海にゆくそ方に設武を所ありそ  
 折とくまてまて海上たうよやどれくが海あま

足下けん坊に才にりてまて一和莊ま出つてくそ  
 う是必海にけ事といひそといいうやうに自由はく  
 も拙まがまらむおにいといふうらにまら海にそ  
 ト一あせ入まると海にり一系れと一あがり体見と  
 おそまうまて丈入六尺れ男纏より一の二人にま  
 次是れ毛サき丈丈式尺もわらんうまのうまを尺  
 やとあり熱身熱れ皮のごく毛おいと眼血を  
 一人とてまて一人又橋とままて橋ふく物とも  
 ままは身細く旬橋身にまていりてさぬと



かくきを腰廻り小昆布れ類々まけ皮のやうにお  
 と刃にまといさわり斗りありりれりの和莊を  
 へてくいつまる顔色はく遠くはじきゆやうらんぬん  
 ぐんといつとせまこ我すこ家とるもの言証さうく  
 去海本名れ飛ぶとやみさくこれの和莊者  
 殺十人殺るそ中にさいあふ付とゆりーりのつ  
 小人紙やうとさるもあつとめおつしーりの紙さ  
 案の同じやうあまごど足短くしてまの二丈余も  
 けらん和莊を清とてさかのわつしーりの式人説

飛び付十指ぐらゝ死て押合ひ屋あひあふ付んとあや  
 うくくから和飛トおてゆやうちんぬんくとささ  
 せぬ事紙いりまらまふかの者たさいくとりふと  
 皆よう系にへとこらひ依しうてそ後まむひと  
 せざりあり和莊を清おひにおとあくうち不審た  
 まに飛下りいさくあまとやにうとけ清くのまよる  
 まいとやさいあまき人足下紙をくまりゆり清中  
 へぬまかぐとあまか物紙のひ付まてま長徳人  
 をやういふやうてかくもごめにしてさいあまを殺んと





鳥



けり事はくはけ玉是長くしてふ登成ゆく事多れ  
 多しやうあまどととまふこれ種さゆふあどてお  
 多りに自由ありはまてまも長時いふも長くして日  
 此のりざしれやうに綱渡り折くげ登中れ一本救  
 獲のさうすらりかよりりれ羽ぐひぐけあどあ極よま  
 ごと物事自由あまどともあけ遅足ありがゆふに  
 此れ人をさぐびにおあり合體あくと其日の業成はと  
 る人今うも同善志とく是下れまをそくとや字と  
 べりやまむひひいりりさぬあくと涙色にこれま

上いふはこも和暎の礼者なりけ國ふ出渡ぬれおが  
 やいなるふ今まこと茲に頼まん持毒い人種もり  
 夫まこ不渡玉あまど物物の痛くあ方へも久くた  
 りこは皆体息がてうんまひ本言成るまにだ  
 何所ゆくも余は出うつりふた度おがーいふけ  
 多しおと拍もい出うらふぬるー子速出ひうい  
 らんとつべ和莊も清もとまの赤と仕人後うた  
 おあさま下さうりませと云なりにより鹿トま  
 やうちんぬんかんと同善志とあうあつとま



和莊を清孤ちれ手長足長がわくらまにのせくきや  
 事教十丁紙うととふうら家番とおがきさりのま  
 あぶ昆布あうめれやうありのほく屋板紙きつてい  
 床とりりのとなく皆立るほく竹葉麦毛とりふ  
 やうありのもくば板まは紙つまゆりーのの具持の  
 はこことうくとりおるれ其申へ和莊を清と入る日本  
 にせとくふまび塩やくの板ありのにほぢや厚く入  
 くるー松系板ののとをせくさいくことつべ其板に  
 けー年若さりののそらこらとあへーらふ風はけふの

男女うららむういづまが男やう女やうつまをまか  
 とむまろ中ふたり番れだんごにやうとろとかけ目を  
 ぐくから板向ふに人臭れぬと糞羊れ白焼とつく  
 和莊を米に箔をとくさんゆりくといふまはまの山持を  
 以ていぬれりてあーといふどはむかりほくつかほんがに  
 おいふ板ありのほくゆも一向毎せむ食物もいわあづら  
 かつく五穀臭れ肉合せぬ後たまぶむくはく板紙  
 まうらさけさるねはむあづづい志くほく十に一つい  
 とふまび毎じさる板ありようく熱くもまぶさーむ



此女まはくとさうりうにと氣もちらば一河あまりのもせ  
 一が叔母此風養をさまむ六後捕或業さう一子長崎より人  
 をやといひやうらまにのせし登海川をかけあつた法然  
 名を成をけよれ人令教百五十歳計りあそく九暖必たり  
 五穀沃ふなまこととさして五穀或大切はとせだ肉念  
 せんばすこ人死すまむと野へ控つまうて仏事此  
 親約ひもかくまこ生まむ母此親乳あくと生育に  
 ぬこれ油と下らぬ油は乳味ふしてとどはるゝり  
 又六歳をうりにあまむととお慈の子長崎の子は

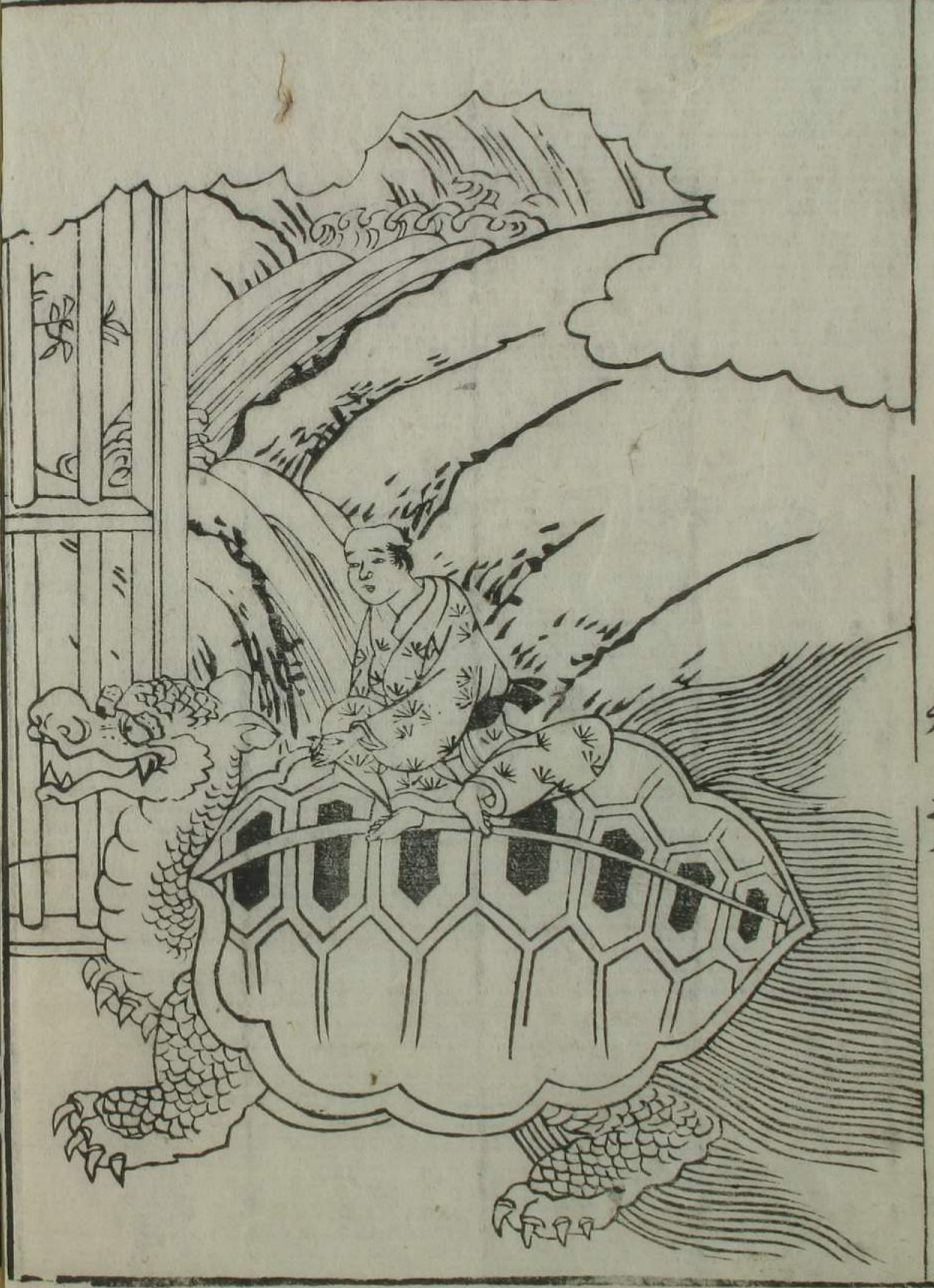
ぐおびに來て我鼻下のかのかぬ振ふさうと神も子  
 く仏もたかくらまひかあももたなく目出な夜事も  
 かく北攻もあく下もあし叔十又六女にあまむが家  
 吾は我とこうら親兄弟此半守けは法徳に和莊三  
 はくくさふあうけはむつと蠻國あまむ人備五  
 是れ及とせまふぐうよくもたなく罪もあ我け土  
 小來つて還るさうらまあまむ何とせ聖賢は及  
 云ろあかの孟子は所の宣王に及瓜とさ終ひるあ  
 とどいけらぬそまより仕方がよく人備の及とお



出づりまゝにけしむ手纏く足長にがゆに不刺不敬合  
 たりおに手長湯とあまれりのが合體せずにおま  
 潤へど是骨一ふ自由ありとさいしつくと智徳也  
 是城心く子長湯か女心喜い隣家のりの、要  
 せりの先陰矢れぶとくまゝ夫婦むつまゝくして  
 玉れ松ある男子とまゝりそまゝに候く仲人役と成  
 てあ四なりちぐれ婚礼二三子もけまゝのそい言  
 一ありまゝく出生の子佐らへ自由自立は是を  
 かゞごたもまゝ知かの時より聖賢たるは成りへ

夜顔紙おのせりるにより今出牙のりの皆座土  
 日本にもおろしぬ人とぬにたり和社を来もた  
 子け必に余やどれ滞る後々々、知まもいついど  
 いろくれ世話をやれてさんと飛ト先生れ事とお  
 三三まゝり候まらひのふれんけまも西日めりぬと  
 あまゝい又余はもめてるまゝとまゝ漢也、おてかた後  
 此拍子紙打らまゝに飛トへ納るひまゝいさほのま  
 滞るゝとぬりへつとあゝまゝにけりけりさうけさ  
 くおまゝといまゝなる





子  
一  
八















人北の人とまどより本すうよりせとゆまんまご  
 合相の養いとんあまも事あまごもあまふか  
 つまび月にまびとりのあがれりのあうとれ町の  
 かやばく康照を突百羽はくいうやれもま  
 どとびあまに西不指あまび又おほもるまごとなま  
 いらまごごととびあまのやまはあまの角に合相が  
 ござらごがあまのらのでいあまご換銀のあま  
 あらかしてまごごととびあまは合相出して後  
 りまご子建に毛狐毛一換銀のゆりまごごら

れこん月やさんといつてま出らおまにねけあま  
 野信れまごあまなりまごあまごあまのあま  
 指病れ後がまごりまごたあまでも湯でもあんで  
 日いとごごらふべいごらまごらとりのまごすく  
 ぬごらりてあまあまのまごらと今水のまごら  
 まごらまごまごまごあまのあまのあまのあま  
 らまごいと不仁つらんまごらと和莊まごら  
 くのまごらと後信れはくまごらとあまの  
 あまらあまらとあまのあまらとあまのあまら



あしふのふゆはるをやはらにむらり

和文十三

和文之末後編卷二終





